

運動遊びの現状と課題

～概念の構築を巡る検討～

山本清洋 井上勝子 城 弘子

The Situation and Tasks on Play Activities
– Examination on constructing a Concept –

Kiyohiro Yamamoto Katsuko Inoue Hiroko Jyou

豊岡短期大学 論集

第 13 号 別 冊

平成 28 年 12 月 20 日 発 行

運動遊びの現状と課題

～概念の構築を巡る検討～

The Situation and Tasks on Play Activities
– Examination on constructing a Concept –

山本清洋・井上勝子・城 弘子

Kiyohiro Yamamoto Katsuko Inoue Hiroko Jyou

I 問題の所在

本論で取り上げる運動遊びという用語に類似するものに、体育遊び、運動、運動的な遊び、運動遊び等々がある。これらの概念に対応する実際の動き・動作は、面白いことにほぼ同じである。用語が異なるのに対応する現実の動き・動作が同じであることは、用語の概念が曖昧であり、結果として、対応する動き・動作の構造が不明確であることを意味する。

まずは、研究物や著書でこれらの用語の概念を整理し、体育、運動に＜遊び＞という用語を付記することで、体育、運動とは異なるどのような意味が付与されているかを明らかにする必要がある。なぜなら、実際の保育や幼児教育で用いられる体育遊び、運動、運動的な遊び、運動遊びの実践は、○遊びの実践というより、幼児の発育発達に寄与するという目的を持った運動実践に近いものが多くみられるからである。

次に、体育遊び、運動、運動的な遊び、運動遊び等の動きや動作には、遊びの特性が内包された構造が構築される必要があるが、近年の研究物や著書には、幼児の自発性に始まる自由な活動であるという表現はあるが、遊びの特性が内包された理論的構造を見ることはできない。このような現象は、遊びという用語を付記してはいるが、遊びそのものの研究が看過されていることに起因すると考えられる。

このような前提から、具体的には以下の解決すべき課題が存在することとなる。

- 1 運動遊びの概念が不明確であり、運動遊びと称しているが、現実には、運動という用語を置換しているに過ぎないのではないか。
- 2 運動遊びと運動が異なるものであるとすれば、運動に遊びの要素をどのように取り入れれば、運動遊びになるのかが曖昧のままである。
- 3 結果として、遊びの要素を取り入れた運動遊びの構造が特定化されていない。

Ⅱ 目的

- 1、運動遊びという用語の取り上げられ方を整理する。
- 2、それらの用語の中で、遊びの要素をどのように捉えているかを明らかにする。
- 3、最終的に、運動遊びの定義を構築する方向と課題を明らかにする。

Ⅲ 従来の運動遊びの定義

幼児期の運動遊びがどのような概念で使用されているのかを、この領域の主要な文献をもとに整理し、その課題を探る。

1、従来の運動遊びの概念

1) 井上勝子にみる概念¹⁾

(1)「昨今の子どもの基本動作が衰えている事例を挙げた後に、「身体全体を使った運動遊びの経験が少なく、幼児期に確保したい基本の動作が84種あるといわれているが、これらがしっかりと身につけていないことを示している。」

(2)「今日の環境が、子どもたちを外遊びから遠ざけている。」

(3)「運動遊びは、単に身体の発育・発達や運動能力、運動技能を養うために必要なだけでなく、同時に知的、情緒的、社会的側面など精神的な発達にとっても重要であり、幼児期の運動遊びは、人間の一生を通じて、生きる力を身に付けるといっても過言ではない。」

(4)「身体全体を使って活動的に遊ぶ運動遊びは、身体的発育・発達を促し、運動能力や運動技能を高めるだけでなく、空間認識や時間認知などの知的発達を助長する」

2) 岩崎洋子に見る概念²⁾

(1)「遊びの中で活発にからだを使う遊びを運動遊びと称する。走る、跳ぶ、投げる、転がる、泳ぐなど全身運動をとまなう遊びや運動遊具、固定遊具を使うなどに用いられることが多い。……『運動遊び』とは、総合的な遊びの中でからだを使うことが中心となる遊びを示しているといえる。」

(2) 運動遊びの世界的な事例として、「コマ、綱引き、ブランコ、石けり、ボール遊びなど誰でも経験している遊びは、世界の国の子どもの遊びの中に多くある。」

3) 幼稚園教育要領解説に見る概念³⁾

(1)「幼児の興味や関心などに応じた遊びの中で、自分から十分に身体を動かす心地よさを味わうことができるようにすることが大切である。そのためには、走ったり跳んだり投げたりといった運動的な遊びはもとより、これにとどまらずいろいろな遊びをすることが大切である。」「運動的な遊びか否かを問わず、幼児の興味の広がりに沿って展開するさまざまな活動を通して、十分に身体を動かし、活動意欲を満足させる体験を積み重ねることが、身体の調和的な発達を促す上で重要な意味をもつも

のであることに留意しなければならない。」

4) 島崎あかねの概念⁴⁾

- ①「身体活動量を確保するための運動遊びの必要性」(112頁)。
- ②「発育・発達の著しい時期(幼児期)における運動遊びに期待されることは、精神的効果と身体的効果の両面が考えられる。」(112頁)。
- ③「乳児期の運動遊びの項で、「身体的な成長と同時に様々な機能も獲得する時期であることをふまえ、乳児期に適した体操(運動あそび)が必要である。」(114頁)。
また、幼児期の運動遊びの項では以下のように記述している。
- ④「遊びを通した身体活動の中で身体のいろいろな使い方を自然と身に付け、運動能力・運動神経を発達させることができる。」(115頁)。
- ⑤「幼児にとって運動は『あそび』の一部であることをふまえると、『あそび』は心がわくわく弾むことによってさらに楽しくなり、楽しくなると更に活発な活動へと移行していく。」(115頁)。
- ⑥「この時期は運動能力の中でも特に調整力を伸ばすような運動遊びが適している。例えば、鬼ごっこやじゃれつきあそび、平均台などである。」(115頁)。
- ⑦「やはり、子どものからだを使って思い切り遊ぶのが本来の姿であると思うし、そのあそびを通して心身の健全な発育・発達が望めるものだと思う。」(117頁)。

5) 水谷光弘の概念⁵⁾

「体育とは、身体活動を通しての教育のことを指します。この身体活動は、人間本来の欲求であり、生きてゆくために欠くことのできないものです。」

「幼児の体育は、幼児が楽しみながら、熱中して取り組む姿を見せる「あそび」であることを第一に考えなければならないでしょう。子どものあそびは本来、大人の介在がなくても、主体的、能動的、内発的、創造的で自由な心身の活動です。この自由な活動の喜びがないかぎり、体育としての成果も期待できないのです。」

Ⅳ 従来の運動遊びの概念とそこから生じる問題点

1 動作、運動、運動遊びの曖昧な概念

運動と遊びの合成語である＜運動遊び＞は、「身体全体を使って活動的に遊ぶ運動遊び」、「遊びの中で活発に身体を使う遊び」、「走ったり、跳んだり投げたりといった運動的な遊び」、「遊びを通した身体活動」「幼児が楽しみながら、熱中して取り組む姿を見せる『あそび』」等と定義されているが、これらの用語に共通しているのが＜活動的な身体活動＞であり、指示するのは、「コマ、綱引き、ブランコ、石けり、ボール遊び」であったり、「子どもが運動遊びの中で体験している『走る』『跳ぶ』

『投げる』などの動作」(岩崎 2008)、「鬼ごっこやじゃれつきあそび、平均台など」(島崎)等である。これらの記述から、運動遊びの内包は、「活動的な動き」「遊び」であることが分かる。ただ、多くの文献で、乳幼児期の84の基本動作が採用されているが、この動作は動きの形式を表現するものであり、子どものなんらかの意思がこの形式に動いた状態が、運動という用語で表記されることとなる。しかし、上述した文献では、＜走る＞という動作と＜走る＞という運動と＜運動遊び＞の範疇の＜走る＞が概念的に峻別されていないことが分かる。

ただ、「からだを使うことが中心となる遊び」や「幼児が楽しみながら、熱中して取り組む姿を見せる『あそび』」、また、「運動は『あそび』の一部である」という記述から、身体活動を内包とする遊びを＜運動遊び＞と規定していることが分かる。とすれば、例えば、運動(身体活動)に遊びの要素を含めた場合の特性と構造を明示することが必要となる。

このような概念の峻別がなされていない結果、幼児を対象とする運動遊び関連の著書で明示される具体的な運動遊びは、そのほとんどが運動の紹介に終わり、運動と運動遊びの概念の違いが明示されず、運動遊びの構造も示されていない。

運動遊びの研究は、心理学とか発達心理学での遊び研究と比較し、明らかに異なる特性を持っている。それは、これら2つの領域では、発達との関連はもちながらも、研究の対象はあくまでも遊びであるのに対して、運動遊びの研究領域での対象は、身体活動を内包とした遊びであるにもかかわらず、乳幼児期の運動機能や発育発達に寄与する遊びという視点からの研究という特性を持っている。勅使千鶴の「課業」的特性とでも言えるものである⁶⁾。それゆえに、遊び本来の特性を運動遊びのなかに構造化することの難しさが存在することとなる。

2 運動遊びと遊び論

1) 広い意味での心理学領域での運動遊びの研究

高橋たまきは、現代の遊び研究の現状を以下のようにまとめている⁷⁾。「遊び研究は、一つの総合的な領域が設定されるよりは、むしろ観点領域を取り込むながら、周辺へまた周辺へと拡大しつつある。1980年以降に発達心理学にみられるその拡大の方向を、以下の5つに区分している。(1) 幼児期のふり遊びへの関心の一層の増大。(2) 乳児期の親子遊びへの関心の増大。(3) 幼児期から、児童期、成人期の遊びへの関心の拡大。(4) ふり遊びと、『心の理論』の関連への関心の台頭。(5) 遊びのユーマーとの関連に対する関心の台頭。」

これらの5つの領域で研究のレビューや発達心理学関連の基本文献には、身体活動と遊びに関する項目はなく、運動遊びに関連する研究もほぼみられない。この現状は、発達心理学の領域では何らかの理由で、身体活動や運動を内包とする遊びへの関心が低いことを示している。ただ、乳幼児期の心理学の文献では、身体の発達の領域で運動の発達が取り上げられているにも拘らず、発達心理学で研究対象として取り上げられることが少ないということは、乳幼児期での運動遊びの研究が、人間の心

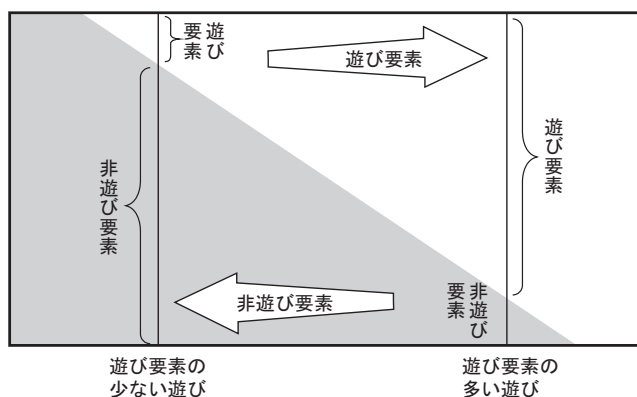
理的発達に寄与する成果をあげていないことに起因しているとも推察できる。心理学領域で、運動遊び研究が盛んであれば運動遊びの概念の曖昧さは残らなかったと考えても過言ではない。

2) 運動遊びの研究での遊び論

(1) <運動遊び>研究での遊びの捉え方

これまでの運動遊びを論じる研究では、身体活動を内包とする遊びを運動遊びと規定している。規定する過程で、デューイ (Dewey, John)、ピアジェ (Piaget, Jean)、ワロン (Wallon, H.P.H.)、ホイジンガ (Huizinga, Johan)、カイヨワ (Caillois, Roger) 等の遊び理論を踏襲しながら、最終的には、ホイジンガやカイヨワの遊び論に立脚し⁸⁾。岩崎が、遊びの成立条件として挙げた次の運動遊びの3つの特性に帰結していると考えてよい。①外部からの強制感や拘束感がないこと。②活動が楽しいこと。③活動自体が楽しいこと等である。

ただ、このように遊びの特性を規定しながら、「何が遊びで何が遊びでないか」とか「遊びの概念化」をめぐる重要な指摘が少なからず見ることはできる。岩崎は、「遊びの概念追及には2つの方向がある」(岩崎、2008、46-47頁)と述べ、一つは活動主体に立脚して判断する方向、二つ目は、活動主体から切り離し、外的な形態から判断する方向をあげている。前者の考えを理論的に裏付ける根拠として、杉原(杉原隆編「新版 幼児の体育」建帛社 2000)の図式を示している⁸⁾。しかし、この図式では、「遊びの要素」と「遊びの非要素」の比重により、主体者の遊び意識を検討するには適切であるが、遊びの概念構築のための示唆を見ることはしない。次の、外的な形態から判断する方向は妥当であり、外的な形態に遊びの特性を取り入れた構造化と概念構築が今後の課題となる。(図表2-3 連続体として捉えた遊び 挿入)



次に、勅使が、保育での遊びとそうでない活動について論じる中に重要な示唆が見られる。「保育計画を立てて保育にのぞむ場合には、指導のうえでの柔軟性はいるものの、遊びと課業を区別しておくことは、保育者に求められることである」⁹⁾と述べる。重要なことは、遊びと課業を区別し、課業

(体育、絵本、音楽、美術・造形など) について、「文化やスポーツの基礎的な分野の活動の継承の際の指導は、それじたいとして遊びとは別の方法が存在するということである」¹⁰⁾と述べる。運動遊びの研究者が、運動遊びを活動的な遊びとして捉えながら、実際の＜運動遊び＞の欄では、遊びでなく運動の紹介に終わっているのは、運動遊びを課業として把握しているところに原因があると考えることができる。その意味で、勅使が、遊びと課業の区別していることは、運動遊びの概念化を図るうえで重要な意味を持っている。

(2) ＜運動遊び＞研究でのカイヨワ

従来の運動遊びに関する研究では、先に述べたように、ホイジンガやカイヨワの遊び論を、遊びの特性を規定する際に援用している。子どもの自発的な遊びへの取り組みを、遊びの根源である「根本的自由」によって理論的に裏付け、同時に、乳幼児期の遊びの分類のために、カイヨワの遊びの分類論を採用している¹¹⁾。ただ、従来の研究で理由は明確でないが、遊びの文化論の決定的な要素であるパイディアとルドウスの概念およびパイディアからルドウスへの発展過程が捨象されている。

カイヨワは、パイディアについて「即興と陽気という原初的能力」と定義し、「遊技本能の自発的表現を包括する言葉であり」「直接的で無秩序な興奮として、衝動的で気儘で、とすると羽目を外しがちな遊戯として表現される幸福の絶頂時に見られる」¹²⁾と説明し、同時に、具体的な遊びの事例として「毛糸の玉に絡まった猫、転げまわる犬、玩具を見て笑う乳児、とんぼ返りやなぐり書き、乱闘や騒ぎなど」をあげる。さらに、「こうした興奮、喧騒の欲求は、まず、何でも触れ、捉え、味わい、嗅ぎたいという衝動、ついで、手に触れるすべて物を落としたいという衝動として現れる」¹³⁾と言う。

このような、パイディアの段階にある遊びが文化として存在するためには、遊びの中にルールが存在が絶対的である。子どもが肉体的な苦痛や精神的苦痛（太陽眺め比べ、ぐるぐる回り、ぶら下がり比べなど）を求め、他と競い合ったり、自分と競い合ったりするようになると、そこには、約束、技量、用具などが必要となる。遊びの中で、これらのいくつかの条件（困難）を克服する方法や他とのつながりをつくりだし、克服する解決する喜びを見出すようになる。このような試み、人間の行動を、ルドウスと称している。また、パイディアはいずれの遊びにも存在するが、ルドウスは、それぞれの特性から、アレア（運の遊び）とイリンクス（眩暈）を除く、アゴーン（競争）、ミミクリー（擬態）に存在している。更に、遊びの中で、パイディアは、ルドウスの段階へと発展してゆく。

さて、カイヨワのパイディアからルドウスへと展開してゆくという見解は、運動遊びの概念化、構造化に際し、決定的な示唆を含んでいる。つまり、この発展過程では、人為的に作った困難を克服し、克服した喜びを求めるのであるが、困難を克服し、乗り越えるために決まり事をつくり、約束ごとを果たす必要がある。観点を変えると、遊びの喜びを増すために、遊びの中にルールや役割が必然的に生じてくることを示している。従来の運動遊び研究では、ホイジンガやカイヨワの遊び論の、遊

びの存在に係る＜根源的な自由性＞と＜遊びの分類論＞を援用したが、パイディアからルドウスへと展開してゆくという見解を捨象していたことから、ルールや役割等を構成要素とする構造化がなし得なかったと推察できる。もちろん、従来の研究でも、遊びのルールや役割に関して、一定の見解はみられるが、それらは運動遊びを保育の中での実践的な取り扱いで論じられていて、概念を構築する際での見解ではなかった。

ただ、一連の運動遊びに関する研究の中で、河邊の鬼遊びの研究は、鬼遊びを対象として、遊びの規範（ルール）が「ごっこ性」から「ゲーム性」へと発展してゆくことを明らかにし、運動遊びの概念を構築する上で重要な示唆を与えてくれる¹⁴⁾。いわゆる、遊びとは何かを問う中で、子どもに自発性とか自由な発想といった抽象的な文言でなく、遊びの特性であるルールを焦点化し、ルールが遊びに定着する過程を実証的に明らかにするという構造的な視点からの研究である。さらに言えば、「ごっこ性」から「ゲーム性」への発展は、「ごっこ性」のレベルでのファジーであったり、時には混沌であったりする遊びを統制する秩序が、「追うー逃げる」の鬼遊びの原型は残しながら、秩序のあるルールへと発展する過程は、カイヨワのパイディアからルドウスへの発展過程を実証化することに成功している。「運動遊び」の遊びを役割や規範から構造化するうえで多くの示唆を与えてくれる。

Ⅳ 運動遊びの概念構築の方向

1 運動遊びの概念

「からだを使うことが中心となる遊び」や「幼児が楽しみながら、熱中して取り組む姿を見せる『あそび』」、また、「運動は『あそび』の一部である」という記述から、身体活動を内包とする遊びを運動遊びと規定していることが分かる。ただ、この際の身体活動の範疇が不明である。子どもの発育発達とのかかわりで言えば、例えば、指相撲、足相撲、おはじき、ビー玉等の重心の移動を伴わない遊びも運動遊びの範疇に入れるのは妥当であろう。従って、ここでは運動遊びを次のように規定したい。

基本的には、子どもの自由な意思により始発し、子ども自らが身体と人、自然、物、動物等の外界との相互関係により生み出した身体的活動を運動遊びと定義する。これらの運動遊びは、自由な発想を根源とし、その運動自体を遂行することに楽しみ・喜びを求め、外界と相互に関係して、ファジーで混沌として遊びの状態からやがて役割、ルール、あるいは、遊んでいるという意識等を基に統制され、且つ、柔軟に変化し得る組織的な状態へと発展してゆく。この定義を捕逸すると以下の特性をもつ。

2 運動遊びの特性

- (1) 子どもの自由意思により始発する。基本的には、子どもの意思が外界に働きかけ、＜身体性＞を核とする運動遊びの新しい世界を作り出す。
- (2) 新しい世界を作る際には、外界の素材との間にストーリー性を含む主体者の意識がうまれ、ルールの機能を果たし、やがて、ゲーム性のあるルールへと発展する。

- (3) 外界の素材に人が介在する場合、当初は、ストーリー性に富んだ役割が生じるが、それらは、やがて、固定的な役割へと発展してゆく。但し、遊びであるゆえに、役割や役割の交代には柔軟性がある。
- (4) 主体の身体性と外界の素材が、相互に関係する中でさまざまな運動遊びが生まれる。
- (5) 主体と外界との相互関係ないし生み出される運動遊びの世界は、主体者の発達段階との関係性が強い。

終わりに

従来の運動遊びに関連する概念の課題を整理した後に、カイヨワのパイディアからルドウスへの遊びの発展過程と河邊の「ごっこ性」から「ゲーム性」の発展過程を参考にし、運動遊びの概念の方向と特性を明示した。その結果、これまでに曖昧であった「動作」「運動」「運動遊び」の概念の峻別には成功したといえる。実践的には、運動遊びのどの場面で、身体の発達を促す機会があり、人との関係がどの場面で生じるのか、また、遊びを統制してゆくルールがどの場面で生じ、発達段階の要因も含みながら、それらが、如何に発展してゆくのかを見通すことが出来ることになる。今回示した運動遊びの特性をより精緻に分析できる枠組みを理論的に構築し、特性の内容を実証的に明らかにしてゆくことが課題として残る。

引用文献

- 1) 井上勝子編著・青木理子・青山優子・大村一光・黒岩英子・下釜綾子・高原和子・宮嶋郁恵：健やかな子どもの心と体を育む運動遊び、はしがき～32頁、建帛社、2006.
- 2) 岩崎洋子編・吉田伊津美・朴淳香・鈴木康博、保育と幼児期の運動遊び、49-50頁、萌文書林、2008.
- 3) 文部科学省、幼稚園教育要領解説、72頁、フレーベル館、2016.
- 4) 島崎あかね、乳幼児期における運動遊びの必要性～発達段階に合わせた運動遊び～、111～118頁、植田女子短期大学紀要第34号、2014.
- 5) 水谷光弘、からだを動かすあそび365、9頁、ひかりのくに、2010.
- 6) 勅使千鶴、子どもの発達と遊びの指導、18-20頁、ひとなる書房、1999.
- 7) 高橋たまき・中沢和子・森上史郎共編、中野茂、小山高正、本田和子、やまだようこ、隅田聖子、増渕宗一、山本清洋、和崎春日、遊びの発達学 基礎編、9頁、培風館、1996.
- 8) 岩崎洋子編（前掲書）、47頁の図表2-3を使用した。
- 9) 勅使千鶴、前掲書、19頁.
- 10) 勅使千鶴、前掲書、20頁.
- 11) 岩崎洋子編、前掲書、47-48頁.

- 12) Caillois,Roger. 清水幾太郎・霧生和夫訳、遊びと人間、40-41頁、岩波書店、1970
- 13) Caillois,Roger. 清水幾太郎・霧生和夫訳、遊びと人間 41頁、岩波書店、1970
- 14) 河邊貴子、小川博久編、岡 健・高橋健介・根津明子・小川清美・戸田雅美・岩田透子・堂本真実子・石渡登志恵、「遊び」の探求 大人は子どもの遊びにどうかかわりうるか、192-209頁、生活ジャーナル、2001.

